

連続コラム

うちんたあのお宝、なんやね？
第4回 下石町の陶祖

美濃焼を生産していた各町では、その地に焼物の生産を伝えた人物を「陶祖」とし、陶祖から続く陶器生産の歴史を記念し、陶祖碑を製作し、代々、陶祖祭を行って来ます。

今回紹介する下石町では、毎年4月に陶祖祭を行っており、陶祖による開窯年代は不明瞭ではありますが、2021年4月を開窯400年の節目とし、陶祖400年祭を実施する予定です。下石町の陶祖については大正時代の史料において、定林寺村の加藤庄三郎氏が下石村の林清兵衛吉重の娘を妻とし、元和年間(1615-1624)に加藤家世襲の窯株*を用いて下石村の烏帽子形桜ヶ根で窯業生産を始めたところがあります。(＊江戸時代窯を築くには窯株が必要でした)定林寺村から下石村へ窯株が移動していることは間違いなく、江戸時代中期頃の史料ではありますが根拠があると考えられます。窯の位置については、清水

地区の丘陵に桜ヶ根と呼ばれる所があり、その周辺で江戸時代の陶片が多数採集されているため、この辺りに窯が存在したと考えられます。開窯時期については、採集資料に17世紀前期頃の鉄絵皿(写真1)が少量あるため、おおよその年代も史料と合致しています。また、鉄絵皿(写真2)は定林寺村で量産されている器種であることや、定林寺村の窯業生産が17世紀前期以降ほぼ途絶えていることから、定林寺村からの陶工の移動を想定することもできます。移動の理由には、陶土の枯渇や領主による陶工の誘致が考えられます。

現在陶祖は第15代となり、初代氏が開窯して以降、下石町での窯業生産の火は途絶えることなく続いています。開窯400年という契機にいま一度初代陶祖や下石の窯業について調査し、その事実を陶祖祭を通して後世に伝えていく必要があります。



下石陶磁器工業協同組合敷地内にある陶祖碑
(提供：下石陶磁器工業協同組合)



裏山にある陶祖の墓
(提供：下石陶磁器工業協同組合)



写真1
桜ヶ根窯の開窯期に近い鉄絵皿
(個人蔵)



写真2 定林寺村で造られた鉄絵皿
(土岐市美濃陶磁歴史館蔵)

第1展示室『現代茶陶展のあゆみ』・第2展示室『元屋敷陶器窯跡出土品展』

6月20日まで同時開催中！